

International Symposium on Drug Dependence,
18th-22nd Oct. 1971 (Hong Kong) に出席して

津 久 江 一 郎
瀬野川病院

アルコール研究 第6巻 第4号（昭和46年12月刊行）別刷
Separate-print from Vol. 6 No. 4 of Japan. J. Stud. Alcohol
December, 1971

Japan. J. Stud. Alcohol
アルコール研究

International Symposium on Drug Dependence,

18th-22nd Oct. 1971 (Hong Kong) に出席して

津 久 江 一 郎

瀬野川病院

(1)

これは I.C.A.A. と香港政府との共催で、 City Hall において17カ国、約100名の代表者の出席を得て開かれた。

私は日本からただ一人出席したので、その概況を伝える。

プログラム

第1日目

薬物乱用の社会文化的考察

- 香港における薬物乱用の状況. Sir A. Rodorigus (香港)
- 薬物乱用の交叉性について. S. Einstein (アメリカ)
- 治療中のヘロイン患者の社会的関係. D. Beckett (英国)
- 薬物の非医療的使用. H. Halbach (スイス)
- 青年期と薬物乱用との関係. W. Garitano (アメリカ)

第2日目

薬物依存患者の治療と社会復帰 (香港における経験) 付 Lok Heep Club における経験

R. Pickett ら 5 名

第3日目

薬物依存患者の治療と社会復帰 (海外における経験)

- メサドン持続治療の経験. J. Jaffe (アメリカ)
- オーストラリアにおける薬物依存の諸問題. D. Bell (オーストラリア)
- インドネシアにおける薬物依存. K. Setyonegoro (インドネシア)
- 薬物依存者に認められた ビールス性肝炎. T. Jersild (デンマーク)
- 日本におけるシンナー中毒の実態. 津久江一郎 (日本)

第4日目

予防計画の目標および方法

- 官公庁の報道とマス・メディアの利用
- カリフォルニアにおける薬物乱用と薬物統制の考察. T. Ungerleider (アメリカ)
 - 香港における予防計画の目標. G. Ou (香港)
 - 官公庁の報道とマス・メディアの利用. M. Watt (香港)
 - 予防計画. W. J. Oram (香港)
 - 薬物乱用の予防策の変遷について. L. Tec (アメリカ)

第5日目

法律制定 — 統制の条令

- 国際麻薬取締まり機構における立場と責任. E.S. Krishnamoorthy (インド)
- 薬物乱用に対する政策; 衛生関係の専門家の役割. N. Chayet (アメリカ)
- 法律制定. R. G. Penlington (香港)
- 統制の条令. A. L. Tokley (香港)
- 統制の条令. G. R. Dunning (香港)

プログラムは、このように表題ならびに発表者名と国名のみであったため、聞き得たものの概略を報告してみる。

(2)

第1日 薬物乱用の社会文化的考察

Sir. A. Rodorigus : 「香港における薬物乱用の状況」

今大戦前には阿片に対してはなんら法的に規制がなかったために阿片の輸出も自由に行なわれていたと言う。現在、香港において主として問題となっている麻薬はヘロインであり、これに対して現在行政的に、
1) 学校教育, 2) 家庭内での指導, 3) 社会的活動,
4) 精神科医の役割として, 5) 報道を通じての社会教育, 6) 科学的、社会医学的研究センターの活動な

どによって近年になってようやくその対策が活発化して来ているとの報告であった。

D. Beckett (英國製塩業組合 麻薬治療センター所長) : 「治療を受けているヘロイン中毒患者の社会的関係」

マリファナ、アンフェタミン、バルビツール剤、アルコールなどが問題になっているが、最終的にはヘロインの常用に陥ると説いている。ここでも若い年代における中毒者が問題となっており、製塩業組合員の中毒者の年令層は、20才~24才までが50%にも及んで最も高く、次で20才までが23.5%, 25才~34才までが14.0%の順になっており、これら若年者によってほとんどがしめられているとのことであった。

H. Halbach : 「薬物の非医療的使用」

薬物乱用を以下のごとく3つに定義していた。

- 1) 悪い目的のために薬を使用すること (evil use)
- 2) 理論的な医学的理由なくして薬を用いる (non-medical use)

3) 容易に薬物を使用すること

7年前には薬物依存 (drug addiction) ということは認められなかつたのが、最近になって薬物そのものが一般人に容易に手に入りやすくなってきており、これがとりもなおさず medical isolation という現象をひき起し、次で自己投薬 (self medication) ということがさかんとなり、医学的な治療を目的としない薬物の使用が発展して來て薬物依存へつながってきたと説明していた。

この問題の解決には、1) 国家的あるいは世界的な規模で薬物の統制を行ない、2) この方面の知識の普及に特に社会問題として努力する、3) かならず医師の処方箋により薬局で薬を買う様にこころがけて self medication を極力抑制することであると主張していた。

W. Garitano (精神科女医) : 「思春期と薬物の乱用との関係」

青少年の薬物乱用の動機の80%は好奇心からであると主張していた。この好奇心をかきたてる理由として、1) 心理的、社会的に子供達は親から隔絶している、2) 性生活への自然で健全な知識が得られていない。つまり子供達は両親を信頼できないから、その不満を薬物によって充たそうとする。あるいはその不満に不自然な性的発達が伴って、いわゆる married children の出現をみることになり、「性と薬物」とはいつも結びつけて考えられた。

ヘロインが好んで使用されるのは、これが一番感情

的に満足感を与えるからであると説いていた。

(3)

第2日 薬物依存の治療とリハビリテーション ではすべて香港における経験に的がしばられた。

L. K. Ding (香港衛生援護協会、医師)

香港の男性の中毒者のうち5人に1人は性的刺激のために最初麻薬を用いている。そしてこの状態は青少年期における性教育が徹底されない限り改良されないと警告した。「性」は薬物依存の一番大きな、少なくとも2番目にあげられる原因であり、またこれは治療後に再発する原因ともなっているが、特に女性の中毒患者にとっては、重大な原因である。つまり、

- 1) ヘロインを吸って最初の性行為を行なう、2) 非常に性的快感が強いので、性行為の前に吸うようになる、3) (性行為そのものに興味を示さなくなる), 4) ヘロインや阿片を媚薬として使用するようになる、5) (性行為に対する興味の喪失), のごとき悪循環を来たし、中毒に陥るには数カ月を要するのみだと説明し、さらに香港においてはこれに対して性教育が全然できていないで、唯こうしたもの押えようという風潮のみが強いとした。

R. Pickett (Tai Lam 刑務所長)

香港においては、薬物としては、1) 阿片、2) バルビツール塩、3) ヘロインなどが問題であるが、主なるものはヘロインであり、その摂取する方法としては、1) ヘロインをタバコの先端につけて吸う方法、2) ヘロインをバルビツールとまぜてブリキの破片に置き、それを下からろうそくの火などで温める方法、3) 静脈注射、皮下および筋肉注射、4) 丸薬として用いる(1粒にヘロイン1%以下を含んでいるという)であるが、中毒者は違法マーケットで包んである薬を2~5香港ドルで買う(この価格は数年来変動していないという)。

なお次のような統計を示した。

年 度 (3月末現在)	薬を飲んで犯罪 を犯した中毒者	有罪を宣告された者
1961	9,653人	14,451人
1966	8,255人	13,195人
1971	6,859人	13,345人

対策としては Tai Lam 刑務所において治療センターを設立し、薬物中毒であつて犯罪を犯した人達だけを入所させることとした。期間は6カ月から18カ月間で、さらに12カ月間のアフターケア期間(強制)

をもうけたとし、

1) 前置き的処置

入所して2~3週間、身体検査を受け(X線、禁断症などしめたもののみ)それぞれの専門家に相談せしめる。

2) 道徳的、肉体的養成として、生産的作業を行なわしめる。(これらを専門のスタッフが見守る)。

3) After care

インタビュー(センターに滞在している間および社会復帰のち職場においても行なう)
などのことを報告した。

(4)

第3日 治療と社会復帰

J. Jaffe (U.S.A.)

薬理学的にヘロインとメサドンの比較がくわしく説明され、この会議で始めてメサドン(Methadone)が各国で非常に問題になりつつあることを知った。

D. Bell (オーストラリア)

1958年頃より急速にコカイン、ヘロイン、メサドンが問題になって来ていると説いた。

T. Jersild (コペンハーゲン刑務所附属病院精神科医長)

「薬物依存におけるウィルス性肝炎」と題して発表したが、その中で中毒患者は長く刑務所に入所させるだけでは、それだけ非社会的になってしまう。大切なことは、中毒患者に「社会は自分を助けてくれている」という感じを持たせるような環境を与えることであると主張した。

そして最後になったが、われわれの発表は「日本におけるシンナー中毒患者の実態」と題するものであり(本誌 p.193~199に掲載)、他の発表が殆どモルヒネ、片などの薬物依存の最も本格的なものに対する発表であったのに対して、比較的薬物依存度の軽いシンナーのことをあつかったので主題そのものの軽さを危惧したが、意外と反響を呼び翌日の新聞(Hong Kong Standard, 10, 21, 1971)第1頁にその抄訳が掲載されたほどである。

(5)

上記の諸報告の実態は、われわれには判り切った平

凡なことであるが、しかも香港などこの方面における未開の土地における実況が述べられたのであって、そういう点においては、この地方の現況として一応受け止めておく必要がある。

2, 3の考察

1. メサドンについて

Methadone (d, 1-6 dimethylamino-4, 4-diphenyl-3 neptanon)は、1930年にドイツで当初抗けいれん剤として開発されたが、抗けいれん剤としてよりも鎮痛剤として有効であると認められ、diphenyl 誘導体の開発が進み、“Amidon”, “Dolphin”が作られたが、それの英語名がMethadoneである。モルヒネに似た薬理作用を持ち、鎮痛作用はモルヒネの2倍もあり、安全性に幅があるため、モルヒネの中毒患者の治療途中で発呈する禁断症状時にメサドンに置換して(メサドンは急に使用を中止しても著明な禁断症状を起こさないので)治療するので、もともと知られている薬物であった(Methadone maintenance therapy)のが、今シンポジウムにおいて、各国(インドネシアにおいても問題になっていた)に於てこのメサドン自身の中毒症が問題になったのは皮肉であると同時に、いかに薬物の連用、投与が困難なものであるかをあらためて痛切に感じたのである。

2. 私の発表に対しての質問のうちで、米国陸軍病院のある精神科医の「米国軍人の間で、モルヒネ、マリファナは重大な問題となっているが、唯、日本に駐留している軍人にはほとんどこの問題が起ららないのはどうしてか」というのがあった。

3. さすがに麻薬の本場だけあってその治療施設、政策はなかなか進んでいたが、なお下記のごときパンフレットなどを入手した。

How ships officers can help to stop drug smuggling.
(printed by the Government printer, Hong Kong, 1965)

The problem of narcotic drugs in Hong Kong
(printed in Hong Kong by Wing TAI CHEVNG printing Co. LTD)

N e w s

当事務所宛に次の郵送物がありました。

単行本

Risk-Taking Behavior. R. E. Carney, Ph. D. 編, July 1971, 発行所: Charles C. Thomas, 301-327 East Lawrence Avenue, Springfield, Illinois, U.S.A., \$ 13.75.

An Arena for Happiness. E. M. Scott, Ph. D. 著, Dec. 1971, 発行所: 同上, \$ 9.25.

Biological Basis of Alcoholism. Y. Israel · J. Mardones 編, Dec. 1971, 発行所: John Wiley & Sons, Inc., 605 Third Avenue, New York, N.Y. 10016. U.S.A., \$ 19.95.

雑誌

Addictions, Vol.18, No.1~4: Addiction Research Foundation of Ontario, 33 Russel Street, Toronto 4, Canada.

Korean Medical Abstracts, Vol.1, No.1~4: Korea Scientific & Technological Information Center (Korstic) I.P.O. Box 1229, Seoul, Korea.

New Hampshire program on alcohol and drug abuse bulletin, Vol. 21, No.1~4, 1971. Program on Alcohol and Drug Abuse, Division of Public Health, N.H. Department of Health & Welfare, 61 South Spring Street, Concord, New Hampshire 03301, U.S.A.

婦人新報 No. 843~854, 1971年: 日本基督教婦人矯風会, 東京都新宿区百人町 3—360.

東京断酒 22—33号, 昭和46年: 東京断酒新生会, 東京都豊島区目白 4—19—18.

WHO Chronicle Vol.25, No.1~12, 1971年: World Health Organization, 1211 Geneve 27, Switzerland.

Quat. J. Stud. Alc. Vol.32, No. 1~4, A and B: Center of Alcohol Studies, Rutgers University, The State University of New Jersey, New Brunswick, U.S.A.

新聞

あしたば: 静岡県断酒互助会, 静岡市馬場町95 鶴山純一方。

断酒 (104~115号): 高知アルコール問題研究所, 高知市八軒町 8.

論文別刷

ERIKSSON, K.: Rat strains specially selected for their voluntary alcohol consumption. Annales med. Exper. et biol. Fen., 49: 67~72, 1971.

ERIKSSON, K. and KIIANMAA, K.: Genetic analysis of susceptibility to morphine addiction in inbred mice. Annales med. Exper. et biol. Fen., 49: 73~78, 1971.

渡辺日章: 急性 alcohol 中毒の動物実験における 2・3 の知見 一肝の脂質を中心として—(講演抄録). 日医大誌, 37 (6): 404~406, 1970.

井出忠哉: マウスにおける methanol 中毒に関する実験的研究. 日医大誌, 38 (3): 154~166, 1971.

HILLBOM, M. E.: Thyroid state and voluntary alcohol consumption of albino rats. Acta Pharmacol. et Toxicol., 29: 95~105, 1971.

NIKANDER, P. and WALLGREN, H.: Ethanol, electrical stimulation, and net movement of sodium and potassium in rat brain tissue invitro. Acta physiol. Scand., 1970. 80. 27A.

FORSANDER, O. A.: Extrahepatic oxidation of alcohol and alcohol metabolites. Metabolic Changes Induced by Alcohol (Edited by G. A. Martini and Ch. Bode), Springer-Verlog, Berlin-Heidelberg, New York 1971.

RAIHÄ, N. C. R. and PIKKARAINEN, P. H.: The development of alcohol dehydrogenase and its isoenzymes. (同上).

SALASPURO, M. P.: Influence of ethanol on the metabolism of the protein-deficient fatty liver. (同上).

ERIKSSON, K.: Inheritance of behaviour towards alcohol in normal and motivated choice situations in mice. Ann. Zool. Fennici 8: 400~405, 1971.

WALLGREN, H.: Alcohol. Hand book of Neurochemistry, 6: 509~523, Plenum Press, 1971.

HILLBOM, M. E.: Metabolism of sorbitol modified by ethanol in rats fed with a choline-deficient or choline-supplemented low-protein high-fat diet. Life Science, 10: 927~938, 1971.

森温理・井上博士・田中義郎・黒川英蔵: アルコール中毒の経過に関する脳波学的研究. 東邦医会誌, 18(5): 761~782, 1971.

赤羽治郎: アルコールの薬理学から. 日本医師会医学講座, 昭和46年刊, 763~771.

何川涼: 第6回日本アルコール医学会総会の印象. 日本医事新報, 2486号, 32~34, 昭46.

額田繁: 慢性アルコール中毒の予防. 東京都精神衛生協議会 心の健康シリーズ No.10. 1971年10月.